



巻頭言

ゆとりを持つとう

長谷川嘉雄*

卒業生が久しぶりに尋ねてきました。学生時代には卒業研究をよくやった印象がありましたので、さぞ会社でも活躍しているのだろうと思いつつ話をうかがっていました。案にたがわず重役になっています。ところが目先の仕事に追われて忙しく、将来のことをじっくり考える余裕がないということです。この卒業生に限らず、日本人全体が何かに追いまわされて、せっせと忙しく働いているといっても過言ではありません。果してこのような状態でいいものでしょうか。

そもそも働くといえますのは、はた(まわりの人)らく(楽)であって、まわりの人が楽になるように人が動くということです。したがって自己のためにのみ忙しく働くというのは、本来の働きではありません。しかも忙しいという字は心を亡くすと書きます。心は芯でもあり、独楽にたとえますと、回転軸があちらこちらとふらついている状態が忙しい状態で、いかにも動いているようですが、実はうまく回転していないのです。これにひきかえ芯となる回転軸がしゃんとしている時には、ちょっとみると止まっているようにみえますが、この時が一番よくまわっているのです。

ある卒業生から次のようなことをききました。複雑な機構をもった装置を設計する場合、大抵の設計者は製図板に向って連日、試行錯誤を繰り返して熱心に取り組んでいます。でき

あがった設計図をもとに装置を作って試運転しますと、複雑な装置のために思慮が行届かず、どこか欠陥がでてきます(これを有漏智^{うろうち}といいます)。しかし特異な才能を持った設計者をみますと連日、製図板の前に坐ったままで、1本の線もひきません。一見、無駄飯を食っているような印象を与えますが、ある日突然図面をひき始めます。その図面通りに作るとみごとに作動します。しかし社内での評価は必ずしも高くないということです。この場合、一見、何もしていないようにみえる人と、毎日せっせと線をひいたり、消したりしている人とどちらが本当の仕事をしているのでしょうか。

私達日本人はみなしあわせを願って忙しく働いた結果、今日の高度経済成長がなしとげられ、物質面では報われましたが、何か非常に大切なものが失われたという気がします。長い間、勤勉が美德といわれてきましたが、平安時代の貴族社会のように遊ぶのが美德といわれた時代もあります。このように倫理は時代とともに変わっていくものです。これからはもっと遊びを重視する必要があります。遊ぶというと何か罪悪感のような抵抗を感じますが、機械をみましても適当な遊びがないと動きません。

働きと遊びのバランスをとり、この遊びすなわちゆとりの時間を有効に使い、物質文明の繁栄とは裏腹に、荒廃した心を取戻すように、お互いに努力してゆきたいものと思います。

*長谷川嘉雄 (Yoshio HASEGAWA), 摂南大学工学部, 機械工学科, 教授, 工学博士, 機械工学, 大阪大学名誉教授